



あなたの はご近所から愛されていますか？

犬の飼い主のモラルが問われています。特に散歩中のマナーの悪さが目立ちます。散歩中のマナー、守れていますか？



排泄物の処理は適切に！

病気の犬のフンには感染性のウィルスが大量に含まれていることもあります。他の犬に感染させないためにも散歩中のフンは持ち帰りましょう。



他人の所有物にマーキングさせない！

他人の家の外壁や植木鉢など個人の所有物にマーキングをさせないようにしましょう。



リードから手を離さない！

散歩中は必ずリードを使用し、手を離さずに散歩させるようにしましょう。「うちの犬はおとなしいから大丈夫」という方がいますが、苦手な方にとってはいくらおとなしい犬でも苦手なことに変わりありません。

～犬の登録と狂犬病予防注射を受けましょう～

生後3カ月以上のすべての犬に「登録」と「狂犬病予防注射」が法律で義務づけられています。「登録」は生涯一度、「注射」は毎年一回です。

健康 通信

常陸大宮済生会病院
小児科部長
熊谷 秀規先生

「子どもの食物アレルギー」

食物アレルギーは、「原因となる食物を摂取したあとに、免疫反応を介して生体に不利益をもたらす反応」と定義されます。昨今、アレルギーへの過度の不安から、全く症状のない乳幼児の親御さんが子どもへの検査を希望して受診する場合があります。しかし、血液検査結果だけで食物アレルギーと診断することはできません。

そのスタートはまず問診です。診察室では、症状の種類（ショック、せき、ぜんめい、湿疹、じんましんなど）、強度（ショック、呼吸困難、嘔吐、かゆみ、くしゃみなど）の他、症状の反復性にも注目しつつ疑わしい原因食物を推定していきます。

次に、必要に応じて検査を行います。一般的には、血液を採って血清総IgE抗体、個々の食物のIgE抗体（特異的IgE抗体）、血中好酸球数などを測定します。また、特異的IgE抗体の検出には、血液検査のほかプリックテスト（皮膚テストの一つで、皮膚に出血しない程度に微小な傷を付けてその上に薬液を置き浸透させて反応をみる検査）も施設により行われます。このような検査の結果、ある食物に対する特異的IgE抗体が検出されたとしても、それが直ちに食物アレルギーを示すものではありません。検査結果それ自体は、お子さんがアレルギーの原因食品に対して抗体反応があることを示すだけなのです。それが症状にどの程度関与しているかは、一層詳しく発現や増悪との関連を問診で確認して判断していきます。

そして、さらに詳しく調べる場合は、試験的除去（試しに疑わしい食物を摂るのを控える）や、安全性を慎重に配慮して誘発テスト（試しに食べてみる）を行います。誘発テストはお子さんによっては危険な場合があるため、主治医と相談が必要です（医療機関において十分な観察のもと行う必要がある場合があります）。これらにより、アレルギーの原因としてある食物が証明された場合、治療の基本はその食物の除去ですが、有害症状が湿疹程度だけなのかショック状態に陥るのかなどの症状のタイプやその重症度によって除去治療の厳格さが異なります。また薬物治療の要否なども個別に検討がなされます。

食物アレルギーの自然経過は、症状の出方や原因となる食物の種類によってお子さんそれぞれに大きく異なるのは当然ですが、一般的には、3歳で50%、6歳で80～90%が落ち着くといわれています。一方、大人になっても食物制限を継続しなくてはならない方もいます。

